ご感想、情報は・Eメール life@sankei.co.jp
・FAX 03・3270・2424

Life 医

家庭医が教える病気のはなし ■■ ⑯

風邪は自然に治ると認識を

風邪について長々と書いてきましたが、家庭医が風邪の専門医であることが分かってもらえたでしょうか。風邪の話題も今回で一区切りです。おさらいですが、風邪について決定的な治療はなく、その場の症状を和らげる治療があるだけです。抗生物質に効果は期待できません。

にもかかわらず、多くの人が風邪薬や抗生物質を求め医療機関を受診します。これはいったいなぜでしょうか。

一つには、テレビCMの影響があると思います。風邪薬は「早く飲めば早く治る」というCMが多く、「一時的に症状を抑えるだけ」という本当の効果を正しく伝えていません。頻繁なCMは、「市販薬が効くのだから、医療機関の出す薬はもっと効くだろう」と誤解を与える元になっているようにも思います。

もう一つは、医者自身が多くの風邪薬と抗生物質を風邪の患者に出すことがあります。患者さんが「効かないような薬がこれだけたくさん使われているはずがない」と思うのも無理はありません。

たいして効かない薬を出されても患者さんが医者に不信感を抱かないのは、風邪が自然に治る病気ということがあります。どんなに効かない治療をやっていても1週間くらいで治ってしまいます。でも、患者さんは「薬を使わなければ10日か2週間は治らなかった」などと薬に効果があったと考えてしまうのです。

風邪で抗生物質を求める患者さんの多くは、抗生物質を飲んだら翌日すっかり良くなったという経験を持つのではないでしょうか。実際は抗生物質を飲まなくても同じように治っていた可能性が高いのですが。そもそも抗生物質は飲めばすぐ効くものではなく、数日の間に徐々に効いてくる薬です。

インフルエンザに対するタミフルなどの抗インフルエンザ薬も同じです。「抗インフルエンザ薬を飲んだら翌日には熱が下がった。こんなに効く薬はない」と外来で話される患者さんがいますが、多くは薬の効果ではありません。

元気な人のインフルエンザは、翌日にはかなりよくなってしまう場合も決して珍しくはないからです。

自然に治ってしまう病気に対し、効きもしない治療をし、治ったのを治療のおかげにするのは詐欺といえないでしょうか？ 自然に治る病気に対しては、そのことをきちんと説明することが第一で、それを伝えたうえで、そのまま放っておくのも選択肢に入れ、治療についての相談をすることが重要なのです。

〔武蔵国分寺公園クリニック院長 名郷直樹〕

特集 散骨を考える 自分らしい死装束 産経新聞出版
活本 終読 ソナエ 春号 ¥840+税

患者団体が診療所開設
筋ジス在宅医療を支援

全身の筋肉が徐々に衰える難病、筋ジストロフィーの患者と家族らでつくる「日本筋ジストロフィー協会」が、在宅患者と家族を支援するための診療所を開設した。患者団体による診療所開設は非常に珍しい。

協会理事長で精神科医の貝谷久宣さんによると、筋ジスは筋肉の衰えによって肺や心臓が弱っていく。根本的な治療法はない。代表的な「デュシェンヌ型」ではかつて、10代後半で多くの患者が亡くなっていたが、気管切開をせずに装着できる人工呼吸器の普及や心筋症治療の進歩などにより、患者の生存期間は大幅に延びた。

ところが、根本治療がないからと医療との接点を保っていない患者も多い。貝谷さんらは「筋ジスの専門知識がある医師がいて、患者が気軽にかかれる診療所が必要だ」と考え、平成22年頃から準備を進めてきた。

一昨年、福岡市近郊で専門医から自宅の一部の提供を受けて初の診療所を開設したのに続き、昨年10月には同協会事務局がある東京都豊島区のビルに診療所をオープンさせた。

東京の診療所長は大沢真木子・東京女子医大名誉教授（小児神経科）。筋ジスの診断や健康管理、簡単な診療に加え、在宅患者への往診もする。高度医療が必要な場合には東京女子医大と連携して当たる。貝谷さんの長男で患者の嘉洋さんが広報を担当する。

貝谷さんは「内外で開発が進む筋ジスの治療薬が実用化されれば、患者が身近なクリニックで定期的に投薬を受けられる体制が重要になる。患者本位の診療を提供できる場として育てたい」と話している。

東京の診療所長の大沢真木子・東京女子医大名誉教授（左）と、筋ジス患者で診療所の広報担当も務める貝谷嘉洋さん